
お付き合い

山口春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お付き合い

【Nコード】

N1891K

【作者名】

山口春

【あらすじ】

息子がタバコを吸っていることに気がついた母。

タバコをやめて随分とたつ父。

タバコを吸うことに意味なんてあるのかな。

なんでもない日常の、ちよっとした話。

俺がタバコをやめたのは長男が生まれた年だから、今年で15年になる。きつかけはなんだったのか、きつと同僚から「お前さ、絶対子供にくさいって言われるって」って言葉を鵜呑みにしたような気もするし、ちょうど仕事が忙しくなってタバコを吸う暇もないくらいだったからなような気もするし、はっきりと覚えていない。

やめてしばらくは、仕事で嫌にいらいらするし、どこか手持ち無沙汰でガムばかりかんでいたけれど2週間もすると、パチンコ屋に行くのが苦痛になるくらいタバコの匂いが嫌いになっていった。服につく匂いも嫌だから休みは極力体を動かすようにして、気がつけば40を前にして俺は随分と若々しいままでいた。

タバコは百害あつて一利なしなんてよく言うけれど、俺にとつてはまさにそうだったのかも知れない。余談だけれど、夫婦仲もいたつていい。タバコを吸わなくなって、それから随分あなたに近寄りやすくなったと妻は言う。全てをタバコのせいにする気はないけれど、この15年、俺の人生は随分と好転したと言える。

「ねえ、何で急にそんな話をしたの？」

妻はコーヒを淹れながら、俺を見てそう言った。

「ん？ただなんとなくね」

なんとなくがなんとなくではないことくらい、お互いに分かっている。

「ってことは、今日言うのね？」

「そうだね。だってあなたが、『僕が言わないと駄目なんだ』って言うから、結局週末になつたんじゃないか」

「そうだけど、私が言っても意味ないもの。それくらい分かる」

「そうかもね。と俺は机に置かれたコーヒを一口、いつもより少し苦いそれを恐る恐る口に入れてそう呟いた。

智之がタバコを吸っていると妻から知らされたのは木曜日だった。俺はいつものとおり家に帰り、コーヒーを飲んでテレビを見ていた。そして、特売で卵が安く買ったのよ、という妻の話に適当に相槌を売っていると、彼女は卵の話と全く同じ声のトーンで息子の問題を切り出した。「あ、そういえば智之、タバコ吸ってるみたいよ」とふーん、と聞き流そうとして、俺はその話が聞き流されるべき類の話ではないことに気付いた。

「あのさ、もう少しテンションあげて話さない？普通の奥さんならうるたえちやうくらしいの問題だと思っただけど」

「うるたえちやうく、吸ってるものしょうがないじゃない。それよりあの子もバカよね。こんなにタバコの匂いが嫌いな人間が近くにいるのに、ばれないわけないじゃない。ほんと、最近あの子の部屋の掃除をするの嫌だったのよ。ただでさえ色々触っちゃいけないものがいっぱいあるのに」

妻は俺の前に座り、淡々と最近の息子の話をしだした。タバコを吸い出したのはここ1ヶ月であること。部屋で吸うのは週に1回程度。どこで買っているのかは分からないけれど、毎回銘柄が違うこと。

「元喫煙者として、銘柄がチヨコチヨコ変わるのはいただけじゃない。ポリシーがないよう見える」

「その良く分からないポリシーは置いておくとして、どうするの？やめさせる？やめるよう仕向ける？勝手にさせる？」

妻は男子のいたずらを先生に密告する前の少女のようにワクワクした声で俺に答えを求めてくる。俺は彼女のような人間のせいで幾度となく先生に怒られた記憶が蘇り、少し息子に同情した。

「まあ、やめさせるべきなんだろう、親としてはさ。ただ、男としてなら、好きにしたらいいと思う。背が伸びないとか、すぐ息が切れるようになるとか、老けるとか、鼻毛が早く伸びるとか、そういうのも分かって吸ってるんだろっしさ」

妻は俺の答えが大体分かっていたんだろう、がっかりもせず

「まあ、そういうのも含めて週末1度話をしてみて」と言うのと、茶碗を洗う作業に戻った。

あなたが言わないの？と問いかけた俺に、妻は先ほどの言葉を僕に投げてきたのだ。ただそれはどちらかというと、「あなたじゃないと駄目だ」というニュアンスよりも「あなたならうまくやるんですよ、どっちに転んでも」といった妻らしさを含んだものであったように思う。

確かに妻よりはうまくやる自信がある。もし彼女がこの任務を預かったとしても、きつと説教すらないだろう。そして、「やめてくれない、臭いから」とだけ言っただけで部屋を出るのだ。彼はタバコをやめるだろうが、それ以外に無駄な傷を負ってしまうだろう。それは何か、女性にしかできない男性の傷つけ方なんだろうけど、それを息子に理解させるのはまだ少し早い気がする。

俺は分かったと返事をして、さめて益々苦くなったコーヒーを飲んだ。そう言えば、コーヒーとタバコが合うなんて一体誰が言ったんだろう。俺には結局最後までわからなかった。

階段を上りながら、ふと息子の部屋に行くのが数ヶ月ぶりであったことに気がついた。俺が子供の頃、1階から階段を上る足音が聞こえるたび、何も悪いことをしているわけではないのになぜかいつも怒られるような気がしておびえていた。その記憶がいつまでも残っているせいで、俺はこんな年になっても息子の部屋に近づくのに妙な苦勞をしてしまう。いつまでも子供の気持ちを残しているのもあまりいいことではないみたいだ。

少し大きさに足音を立てて、息子に自分が近づいてきていることを知らせる。急げよ、隠せよ、俺だって別にお前の罪を進んで暴きたいわけじゃないんだからな、と、およそ父にあるまじきことを考えってしまう。まあ、そんな父親がいてもいいじゃないか、と俺は自分

に言い聞かせる。息子の部屋のドアが迫る。

「おい、いいか、入るぞ」

と俺はドアノブに手をかける。息子のあわてた音が聞こえる。せつかく分かりやすく上ってきたのに。俺は少し余裕を持ってドアを開けた。土壇場であせるところまで、親に似る必要は全くないんだよ。「お、何してた？」

と俺は分かりきった質問をする。つくづく息子には運がない。週に一度のタイミングで親が来るなんて。彼はあまりにも露骨にしまったという顔をして俺を見た。

「別に、何も」

と、どこかの女優のように呟いて彼は机に体を向けた。その背中は、成長したといってもまだまだ子供であることをはつきりと俺に伝える。

部屋はうつすら白く煙り、俺は久しぶりの匂いに顔をしかめる。そうか、これはやめなさいと国をあげて騒ぐのも分からなくはない。明らかに毒だと伝えるその匂いは、俺を息子に向かわせることを決心させるに十分な効果があった。

「そうか、まあそれは別にいいんだ。ところでさ、お前タバコ吸ってるだろ。ほら、だからだらしゃべってもしょうがないからはつきり言うけど」

俺があまりにもあっさり話をしたものだから、息子はお笑い芸人のように派手に振り返る。あわてすぎて彼の体が椅子から滑り落ちそうになる。俺はそれを支えようと足を一歩踏み出して、自分がこけそうになった。

「なにしてんの？」

と息子が俺を見る。あきれた表情で、椅子から少しだけ腰を浮かせた。

「いや、助けようと思って」

「こけないし。それより、タバコの話だけだ」

息子も覚悟だけはしたのだろう。自分からあっさりと話を切り出す。

こういう潔さは妻に似たのだろうか、俺は少し息子をうらやましく思う。

「お、タバコ。そうだね。1ヶ月前くらいから吸ってるんだろ？」

「うん。吸ってる」

「なぜ？」

「お父さん、子供の世界も今じゃ複雑多様化してるんだよ。お父さんもよく言うじゃん、付き合いの酒はまずいって。あれと同じ」

と、息子はポケットからタバコを取り出した。開き直っているようにも見える。俺は少しいらいらして、

「ガキがあまりかつこつけないほうがいい。むしろみつともないからな」

と彼の目を見て話す。彼は少ししゅんとして、俺を見る。こういう反応が来るあたり、俺は割と父親らしく彼に接してきたのだろう。俺は良く分らないことで安心してしまう。

「で、何でタバコなんて吸うんだ」

「タバコを吸わない人間にはわかんないこともあるんだよ。背伸びしてるとか思ってもいいよ。お父さんにはわかんないからさ」

息子は俺を見て確かにそう言った。伊達に15年やめたことも無駄ではないらしい。身近にいる人間を欺けているならそんな素晴らしいことはない。

「え？あるよ。昔ずっと吸ってたから」

「え？」

「お前が生まれたときにやめたんだよ。それまでずっと吸ってた。知らなかった？」

「知らない。初めて聞いた。いつから？」

そう聞かれて俺は言葉に詰まる。正直に言うべきだろうか。それとも、父親らしく厳格な姿を見せ続けるべきだろうか。俺はあっさりと前者を選択する。

「15歳」

俺が始めてタバコを吸ったころ、俺の周りでタバコを吸っていない人間を捜すのは、海の中に投げ入れられた指輪を見つけるよりも難しかった。俺達はタバコ当番を決め、交代でタバコを買ってきては1箱をみんなで分け、作戦会議をするように集まって毎日吸った。それは放課後に与えられた数少ない楽しみだったし、タバコを吸っている間僕達は秘密を共有する同士だった。

「お前さ、ゴールデンバットはやめろつつたじゃん。辛いんだよ」
裕介がそう言うと、聡は

「金なくてさ、次はセツタ買ってくるから我慢してくれよ」
と申し訳なさそうに答える。

「健二はいいよな、あそここのばばあ、お前にだけ売ってくれるし。俺らあそこ行くとほうきで殴られんだぜ。ぜってーもういかねーよ」

「ばばあって、人の親の悪口は言うもんじゃねえよ？おかげで好きなタバコ吸えるんではないか」

と俺が言うと、彼らはそりゃそうだと笑う。

「お前のかーちゃん理解力ありすぎだから。うちなんてこればれたら追い出されるよ」

裕介は右手をちよいと上げる。緩やかに煙は昇りそして消える。それはここにある時間そのものだった。

健二というのが俺で、俺は近所のタバコ屋でタバコを買っている。

タバコ屋は家から近く、歩いて30秒ほどでつく。そして一言、

「今日の！」

と言えば、奥からタバコが出てくる仕組みだ。

「あんたね、ガキがタバコ吸ったってろくなことないんだよ」

店先で呟くのは、俺の母親である。

「いいじゃん、これも付き合いだよ。分かる？子供の世界も複雑なんだぜ？」

俺が得意げに言うと、母親は、

「まあ飽きるだけ吸って、すぐに後悔するといいよ」
と俺にタバコを渡す。俺にはその時後悔するの意味がよく分からなかった。

「後悔先に立たずだけどさ、今やりたいことやるのも大事じゃん？」
「はいはい、行ってらっしゃい」
と、口から煙を吐き出して母親は俺を見送った。

「あのさ、頼むからタバコやめろって言わないでよね。ほんとなら親が子を注意するもんなんだろうけどさ、お母さんにだけは言われたくないと思うんだ」

そう言つと、
「言つわけないだろ、これもあんたの小遣い差っぴいてるから売ってやってんだよ。自分の失敗は自分で気付きな」
と豪快に言い放たれてしまった。

俺は生まれてこの方、あの人を母親だと認識できずにいる。仲のいい友達つてのが一番近いんだろうけど、何か違う。結局その答えを教えてもらうことはなかった。自分で気付きな、があの人のお癖だった。俺はなかなか気付けずにいる。

「健二、あんた大人の前で一本も吸ったことないんだろ？」
突然母親がそう聞いてきた。僕は正直にないと答える。

「今度吸ってみな。先生が怖かったら私でもいいから。また違う何かが見えるだろうさ」

僕はうんだかはあだか、適当に返事をして学校に向かった。背中で母親のちゃんとするんだよという言葉を受けて、僕はそれが何を意味するのか考え、少し怖くなってやめた。

「ということをしていた」

「おんなじこと言ってるし」

息子が俺を友達のような目で見ている。まるで昔話の続きを求める幼稚園児だったあのころように彼は俺に話の続きを求める。

「いや、それだけ。だから、目的もなくタバコを吸うお前の気持ち
は分かる」

「そう、じゃあ結局やめろって言うわけだ。結論は同じなんだね？」
「ただやめろって言うっても説得力ないだろ？俺は後悔したから、お
前もやめたらいい。先人の知恵ってやつだよ」

ふうん、と息子は答えた。特に反省しているようには見えないから、
そこにあるであろう少年なりの事情を俺は受け入れることにする。

「まあ、僕もさ、やめなきゃなって思ってるんだ、実際。でも友達
が吸うから付き合いつてもあつてさ。部屋でたまに吸うのも久し
ぶりに吸ってむせたらかつこ悪いじゃん。それだけなんだよ」

大体分かるよ、と俺は息子の頭に手を乗せる。息子は恥ずかしそう
に俺を見た。

「でもさ、おばあちゃんって昔からああだったの？」

「ああだった。息子の目の前で鼻から煙吐き出すんだぜ。ちよつと
勘弁してくれって思うときもあった」

息子はけたけたと無邪気に笑う。彼の笑顔は、子供のそれだ。

「すごいな。それ見たかったなあ」
見るものではない、と俺は呟く。でも、嫌いではなかった、とも思
う。

「で、やめるか？」

俺が聞くと、息子は来年度からね、と答えた。クラスが変わるから
らしい。

「そうか。そんなんで友達変わるのか？」

「だから、多様化してるの、現代は。ニーズに合わせた友情もある
ってこと」

「寂しいな」

俺が素直にそう言つと、息子は、

「そんなんで壊れない友情もちゃんと持ってるから大丈夫。そいつ
にもいい加減タバコやめろって言われてるしさ」

と笑った。俺は少しあせる。これじゃ俺が何をしに来たのかわから

ない。結局自分で解決できてるんじゃないか。

「ところでさ、お父さんはもうタバコ吸いたくならないの？」

「ならない。少なくとも家族の前ではもうならないだろうな」

そっかと息子は言う。そして、

「お母さんてさ、血がづながってないのになんかおばあちゃんみたいだね。どっちかっていうと自分で気付きなっただけでしょ？お父さんを2階に向かわせたってことはさ」

と、得意そうに言った。そうかもしれない。でもつまりそれは、俺がマザコンってことにならないか？

「でも、僕二人の子供でよかったよ。未成年の喫煙を盾に話が始まったら僕もきつとむきになってたと思う。北風と太陽みたいなものでさ」

そうかもな、と言って俺は自分がちつとも説教をしていないことに気がついた。

「目的を達成できれば、手段はなんだっていいか」

俺がそう言うと、息子は少し背伸びをした。気がつけば随分と背が伸びている。

「タバコあげる。それまずいんだ。」

息子は手の中の赤いボックスを俺に渡す。

「俺吸わないぞ。ゴミを押し付けんなよ」

「捨ててよ。僕にとつての3000円は結構勇気のある値段でさ、捨てたくても手が躊躇するんだ」

それもなんとなく分かる、と俺は息子からの仕事を委任される。結局俺がこの部屋に来て分かったことは、俺達家族はかなり仲がいいんじゃないか、ということだけだ。それではいけないと、俺はあわてて息子に言った。

「俺はいいけどな、お母さんは心配してんだからちゃんと謝ってこいよ」

息子はもちろん！とその足で一階に向かった。その素直さもつらやましくて、俺は一人息子の部屋に残り天井を見上げる。真っ白なそ

れは、今後も黄色く変わらないことを予感させた。

一階に下りると、智之が素直に椅子に座り、母親から説教を受けていた。

「タバコは臭いから駄目」

とは論点がずれている気がするが、母親の言うことに息子は素直に従うからそれでいいのだろう。

「さて、智之、分かったか。タバコはやめろよ。お前ももう分かってるんだし、あんまりきつく言うなよ」

と、父としてのまじめに入ったとき、妻が突然、

「じゃあ、吸ってみて。換気扇の下で」

と、息子に言った。俺と息子が漫画のように顔を見合わせる。妻は続ける。

「私、別にタバコを吸うこと自体は悪いと思ってるじゃない。そりゃ未成年は駄目だけど、それも健康のために言ってるわけでしょ。自分がわかってやってるなら好きにしたらいいと思う。だから、親からこそそしないで隠れずちゃんと吸いなさい。よけいみつともないよ」
息子は少し困った顔をして、

「別に吸いたくて吸ってるわけじゃないから、嫌だよ」

と当然のことを言った。俺も、

「別に吸わせなくてもいいじゃないか」

と息子を援護する。これがいけなかった。

「あら、あなたも昔吸ってたんでしょ？別にいいじゃない。親は子供の全てを知るべきよ」

妻はそう言って僕からラークを受け取ると、息子に差し出す。息子はしぶしぶそれを受け取る。俺はふたりの間でおろおろしている。本当にいざというとき男は役に立たない。

「別に嫌だったら一口でいいからね」

妻はそういうと換気扇の電源を入れた。智之はしぶしぶタバコを口

に運ぶ。

「たぶんね、こんなこと言われる中学生、日本で僕だけだと思う」と息子が言うと、俺もそうだろうな、と彼を見た。妻は一人得意げに僕達を見ている。

息子は慣れた手つきで火をつけると、一口、少し深く吸い込んで換気扇に向かって吐き出した。煙は一目散に外に吸い込まれ、匂いも残さず消えた。息子はそのままタバコを水道であっさりと消す。

「これでいいの？もう吸わないからね」と息子が言うと、母親は少し考えて、

「あんた吸わないほうがいいわ。1ヶ月吸ってってそれですよ。口の横から空気入ってるし、吸い方が下手。かつこ悪いよ」

とだけ言って、残ったタバコの箱をゴミ箱に躊躇なく捨てた。俺達はその姿をただ見つめ、そして二人同時に深いため息をついた。

智之はタバコをやめ、俺は相変わらずタバコを吸わずにいる。妻はタバコの匂いが消えた家をきれいにし、今では誰がタバコを吸っていたのかすらわからない。

あれから息子と何度か話をした。息子は、

「タバコを吸って、あんな傷つき方をするとは思わなかった」

と俺に漏らした。俺は息子を同じ性別の人間として慰めた。おかげで俺達はまた随分と仲良くなれた気がする。

妻はなぜあんなことをさせ、あんなことを言ったのだろう。僕は未だに聞けないでいる。でも、あの時母親が僕の前で言った「大人の前で吸え」って言うのはこういうことだったのかな、とも思う。大人がきちんと説明すれば、子供は案外分かってくれるものなのかもしれない。

俺がリビングでコーヒを飲んでいると、妻が言う。

「タバコなんてろくなもんじゃないけどさ。付き合ってたときのあ

あなたのタバコの吸い方はかっこよかったと思うよ。この間の智之の
20倍くらい

つくづく、タバコってよく分からないな、と思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1891k/>

お付き合い

2011年1月26日07時25分発行